

日本ラグビーが勝てない理由

The reason why Japanese Rugby cannot win.

1K08B016－8 井口剛志

主査 寒川恒夫 副査 倉石平

第一章緒言

日本においてメジャースポーツの部類には入らないラグビーという競技の成り立ちは、多くの人の努力が積み重なって今日まで続いている。戦前、戦後における苦しい状況下にも関わらず、ラグビーという競技を伝播させるために奔走する人々の努力があった。失われた早慶戦の復活、海外外交のかけ橋、ラグビーがもたらす影響は少なくなかった。先の2019年には日本でラグビーワールドカップの開催が決定している。開催国として情けない結果を残すわけにはいかないし、ラグビーという競技の人気を向上させる機会である。そのために、海外のラグビーチームに日本が勝つ方法を考察し、研究しようと考えた。

第二章統計から見るラグビー

日本ラグビーが勝てない理由を探るには、まず数値的観点から日本と海外の差を比較してみることで見えてくるものがあるはずだ。その結果日本はラグビーをしている人の数、すなわちラグビー人口が少ないことが分かった。また、国内の人気スポーツに比べても日本のラグビー人口は少なかった。それには日本におけるラグビーの人気度が低く、関心が薄いことが分かった。日本ラグビーを強くするには、人気度が必要不可欠であり、まずは日本ラグビーの人気度を向上させることが必要である。

第三章ラグビーと発展

ここからは技術的観点から勝てない理由を探ろうと思う。まずは、ルールが形成された歴史を知る必要がある。ラグビーはルールを理解せずには勝てない競技である。ラグビーという競技は時代のニーズに沿ってルールも変容しており、年々見ている側がより楽しめるようにルール改正を行っている。また選手の安全面も考慮してルール変更を行っている。また、日本と海外では発展過程で決定的な違いがある。日本は、学業の中にラグビーを発展させたのに対し、海外はクラブ・チームをつくり、彼らの生活の中でラグビーを発展させてきた。海外はグラウンドとクラブハウスを所有しているのが当たり前で、青々としたグラウンドの中でラグビーをしてきた。対して日本は、学校内で選手を募りチームを作ってきた。学校ありきの考え方で普及したため、部活の域を超えることはなかった。海外は生活の一部にラグビーを溶け込ませているため、根強く人気を広げることに成功した。

第四章海外と日本の力の差の原因

実際に日本と海外ではどこの部分において差が出ているのだろうか。

理由のひとつとして挙げることができるのはコンタクトプレーである。ニュージーランドと日本の身長と体重を比較してみると圧倒的にニュージーランドが日本を上回っていた。また、ラグビー選手だけでなく、国民全員の平均身長と海外の国々の平均身長を比較しても日本平均身長が低いことが分かった。となると、遺伝子や食文化が体格の差を生みだしているのではないだろうか。実際の食事の比較をすると日本はヘルシーな食事で体を大きくするには向いていない食事だということが分かった。ラグビーにおける体格差はコンタクトプレーでの差となる。このことは、日本が勝てない理由に大きく影響している。

第五章日本の今後と課題

ラグビーの勝敗は体格だけで決まるものではない。日本代表は、「低く」「はやく」「激しく」「走り勝つ」をまとめて「4H」と呼び、「4H」をテーマにしている。この「4H」はとても重要で、コンタクトプレーで劣っていてもこの「4H」の部分が勝てれば試合に勝つことは大いにある。前章ではコンタクトプレーは重要だと述べた。それは真実である。しかし、海外に通用するコンタクトプレーを身につけるには多大な時間と努力を要する。コンタクトプレーを身につける以外に勝つ方法を探さなければならない。そういったときに挙げられるのがこの「4H」の部分である。しかし、今回のワールドカップ2011の試合を見てみると、その「4H」を感じるができなかった。相手に良いようにアタックをされ、簡単にトライを許し、自分たちがアタックをするとミスが多く自滅に近いようなシーンがいくつか見られた。日本代表が情けない試合をしていてはやはり、ファンは増えない一方だろう。まずは、日本のテーマである「4H」を遂行できる選手を選ぶべきである。また、日本の精神に沿えない外国人選手を代表に入れるべきではないと思う。

第六章ラグビースピリッツと考察

研究する意義は、2019年に開催国として上位に絡まなければならないこともあるが、ラグビーの精神、ラグビースピリッツを普及させるためである。ラグビースピリッツには、自己犠牲の精神や仲間のために頑張ることなどがある。近年、深刻化している犯罪の若年化やニートなどの問題をラグビーが解決できるとは言わないが、ラグビースピリッツのような精神が欠けているからこのような問題が多発しているのではないだろうか。